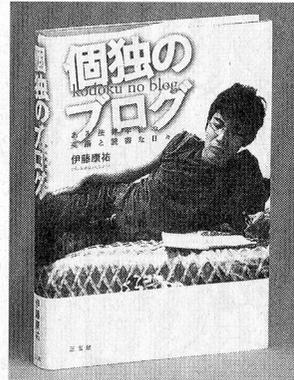


書

個独のブログ

急逝の若者 残した文章



21歳で急逝した大学生プログラマーがインターネット上に残した文章を、両親が出版社に持ち込み、本にまとめ上げた。短すぎた人生のディテールがちりばめられている。

著者は幼少期から本に親しんだ。クセノボンの「アナバシス」や辻邦生「背教者ユリアヌス」……。両親は息子が興味を持ちそうな本を机の上に横んでいたそう。彼はそれらを「暇なら勝手に読めばBooks」と呼んで書評を書くようになり、感受性をはぐくんだ。

名古屋大に進むと米国留学を考え、国際的な法律家を目指すようになる。以後、英語力のスキルアップに関する記述が増えいくが、これがすごい。ヘタな参考書より優れているのである。

語学能力は「負荷×効率×量」。それぞれをアップするには興味のあることを「英語で」勉強するのが一番と説く。とくにドラッカーなどのビジネス書の英文は読む訓練になるとのこ

伊藤 康祐 著

と。なるほど、と勉強になった。彼の年ころは一般的には「ゆとり世代」と言われる。私が編集長を務めるネットマガジン「アクロス」では、東京・渋谷を中心に若者の定点観測を続けているが、この世代は「新人類ジュニア」だと考える。親の経済力や志向性によって価値観がバラバラなのが彼らの特徴なのだ。つまり、母親がギャルなら娘もギャル、父親がサブカル好きなら息子もサブカルどっぶり、といった具合だ。

彼も、同世代のバラバラ加減は十分意識していたようで「人々は『孤独』ではなくとも『個独』なのではないか」「『理解不能な他者に対する配慮』というものがあつていい」と書く。だが、客観性を意識して抑制された文章からは、心の叫びは見えるようで見えなかった。

今はプログラマーは、その書き込みが商品の売れ筋を左右するほど影響力を持つ存在だ。しかし、この本の文章はそのような熱さとは無縁で、自らを客体化し、淡々としたトーンだ。ひよっとすると、そこにこそ「他者に分かってもらいたい」と願う「若さ」があったのかも知れない。

(三五館・1575円)

いとつ・110p 19987

年愛知生まれ、2009年死去。

評・高野 公三子 (パルコ「アクロス」編集長)